慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の様相
Sub Title	An aspect of an early confraternity of the Mt. Fuji : recently discovered 'Sengen Daibosatsu Enghi'
Author	西岡, 芳文(Nishioka, Yoshihumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2004
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.1 (2004. 6) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20040600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新出『浅間大菩薩縁起』にみる初期富士修験の様相

西岡芳文

はじめに

富士山をめぐる信仰は、富士宮市千居遺跡のごとく、富士山に向かって巨大な環状列石が造られた縄文時代にはすでに存在していたものと推定される。文献によって具体的な信仰の姿が知られる歴史時代に入ってからは、およそ三形態の信仰が時代の変遷とともに成長・衰退を繰り返していったことが知られる。(1)

歴史時代における富士信仰の第一の層は、駿河国の浅間社（富士宮市浅間大社）を中心とした古代の国家的祭祀である。時あたかも富士山の火山活動の最盛期を迎え、しきりに噴火を繰り返すたびに、朝廷から奉幣使が派遣され、山の神を慰撫するとともに、祭神に叙位が行なわれたことが、六国史などの記述によって明らかである。

こうした富士山への信仰は、言わば京都からみた国家的祭祀であり、東海道の要衝に位置する富士山の遥拝所としての富士宮浅間社の地位を確立させることになった。

次に平安後期、十一～十二世紀に起こった富士修験の活動が第二の層をなす。末代と名乗る修行者が、富士登頂に成功し、貴賤上下の帰依を受けて勧進活動を行ない、富士上人と呼ばれ、久安五年（一一四九）にはついに鳥羽上皇の帰依を得るまでに到った。末代を「棟梁」と仰ぐ信仰集団は、やがて富士山麓村山に拠点を構え、富士修験の中核となった。村山修験は、富士山全体を両部曼荼羅の具現としてとらえ、登頂および山中・山麓の霊跡を巡ることを修行とする、言わば典型的な神仏習合に基づく山岳信仰を形成した。村山修験が栄えた中世は、富士火山の活動は概して平穏な時期にあたっており、選ば

れた信仰者が山頂をきわめることが可能になったのである。[2]

第三には、江戸時代後期に形をととのえた富士講が、富士信仰の最も新しい層をなしている。長谷川角行・食行身禄らを始祖と崇める富士講は、仏教とも神道ともかけ離れた独自の教義と修法を創出し、富士を望む江戸およびその近郊の民衆によって支持された。富士講は、信仰を母体にしながらも、むしろ先達に率いられた一般の庶民が富士登山を体験するレクリエーションとして流行し、幕末から明治初期にかけて最盛期を迎えた。中世の富士信仰の中核をなした村山修験は、宝永四年（一七〇七）の噴火によって壊滅的な打撃を受け、急速に衰退したため、新旧の富士信仰の間にほとんど摩擦は生じなかったようである

現代においては、富士山を対象とする山岳信仰は影を潜めているが、大石寺（富士宮市）を中心とする日蓮系の富士門流に属する教団が勢力を拡大している。富士山に末法時代の法華信仰の本門戒壇を建立することを目標にした宗教運動は、通常の山岳信仰とは範疇を異にするが、中世の富士門流には、富士縁起を応用して教義を説いた文献も伝わっており、富士信仰の流れの上に位置づけることも可能である。[3]

このように、歴史の変遷とともに富士山に対する信仰も姿を変えている。古代の国家祭祀の系譜を引く富士宮浅間大社が今なお栄え、富士講は衰退に瀕しながらも、時代が新しいために多量の遺品を残しているのに対し、中世に栄えた村山修験の信仰の内容を知る手がかりは乏しい。何とかその実態を解明する手掛りはないものであろうか。

ところで最近、金沢称名寺より江戸時代に流出した資料の中に、村山修験の根本縁起と目される文献が見出されたことから、その内容を紹介しつつ、中世の富士信仰の様相を探ってみることにしたい。

一　称名寺旧蔵『浅間大菩薩縁起』残巻の紹介

近年見出された標記の資料は、『浅間大菩薩縁起』の標題をもつ中世の縁起書である。冒頭一紙分が称名寺に伝わり、神奈川県立金沢文庫に収蔵されており、末尾約三紙分が、尊経閣文庫所蔵の『古文状』と題された近世の模写本に収録されていた。本文の正確な翻刻は別に公表したので、[4]ここでは金沢文庫に残る冒頭部分も合わせ、読み下しにして紹介することにする。

浅間大菩薩縁起

ほのかに聞く。月氏国に一の島あり。皆鎮守諸神を禘し奉る。然る間、夜中に一島辺失せ畢ぬ。奇を成して東西南北を尋ねしむるに、日本国東海道駿河の国に渡りて、浅間大明神と顕れ給ふ。是れ、震旦文殿の日記に注し置けるなり。

古老伝へて云く、山を富士と名づけたるは、郡の名に取る。山に神ます。浅間大明神と名づく。この山高くして、雲表を極む。幾千丈と云ことを知らず。然る間、湧出の後、何千年と云ことを知らず

而るを、大和国葛木葛上の郡、茅原の村住、加茂の朝臣の子息小角と云者、若うして公につかえ、役の行者と名づく。広学多智にして三宝を仰むることを志となす。常に葛木山に入りて、棲となす。三十余年の間、孔雀明王の法を修行す。ある時、五色の雲に乗りて、仙人の都に通ず。爰に従五位下韓国広足の朝臣、初は是を師になし、後には妬謀し、公家に讒言して云く「役の居士は是れ世を酔す者なり。国のために凶悪たらんか」と云々。然る間、行者葛木の一言主の明神ならびに諸の鬼神等を集めて、課せて云く「この葛木山と金峯山との際に、渡橋を造るべし」。爰に神鬼等、巌を削り調へて、行者に申して云く「我等各形醜し、願はくば夜中を以てこの橋を渡さん」と云々。爰に行者、攀縁を成して云く「然らず」

（後欠。以上金沢文庫保管古書二四九函）

……

（前欠。以下尊経閣文庫『古文状』所収模写、巻末部分）

上に苔あり。白糸に似たり。一の層汲に石細砂あり。色黒くして厚さ、深さ三寸ばかりなり。踝を隠す。これすなわち三の宮の王子の住処なり。二層の細砂、その色五色なり。その形、尖なり。木に登るが如し。三層の細砂は深くして、膊を没す。色はまた前の如し。四五六層みな前に。七層に伏礼細砂あり。中に巌石あり。金銀琉璃の色相交れり。八層は所謂頂上なり。〈已上『攀図』〉

頂上に八峯あり。廻れること屏風に似たり。縦（タウケ）八丁、方三十六丁なり。東の峯三重あり。焔煙（コレコレ）、額に似たり。先づ辰巳の峯は水精の嶽なり。南方の峯は僅かに指参の人道なり。前に平地あり。田四丁ばかりなり。未申の峯は冠の嶽なり。前に石室あり。金

時上人、種々の仏具等を安ず。西方の峯に火躰あり。相形火の冠の如し。戌亥峯は形、水冠の如し。北方の峯は馬の背を論ず。丑寅の峯は円き嶽なり。〈已上金時上人註置也〉

又、八山の中間に一の嶋あり。形、虎の蹲（ウスクマ）れるが如し。また煙漫々として雲に似たり。八峯の内十丈ばかり下に窟（イハヤ）あり。形、塩竈（エンソウ）の如し。煙繞（マツハ）って圓光に似たり。〈同上人記〉

別に副へる新山

御嶽（ミタケ）の涌現の後、三ヶ年を経て以後、列擲五年〈庚申〉夏のころ、御峯の辰巳の角にて麓（フモト）の下、御峯出現の時の如し。十日を経て山と成る。山の葦高根（アシタカ）なり。未だ成り定まらざる前（サキ）は平。

……

（中欠か）

冨士の峯に攀らんとするの念を発し、山宮に参籠し、一百ヶ日の間、大仏頂三落叉を満じておわんぬ。明日、峯に登る思を企つるのところに、示現あり。嶮山に赴（ヲモム）くの陽なり。仍て石室に宿して、五ヶ日夜を経る。ここに僧あり。頼然と名づく。同時に発心して、峯に登らんと欲ふ。しかるに信力を夢み、去る

天承二年閏四月十九日を以て、峯に登る。眼を廻して、崔嵬を眺望し、耳を留めて安く鳴く声を聴く。次第に見廻して、金時上人より始め日代上人に至るまで、先に登る上人等の交名宝物等これを見る。随喜の涙、独り袖の上を禁じ、懺悔の心、孤り肝中に萌（キサ）す。なかんずくに日代上人の竹筒の金泥の経、同じく石窟の中に納め奉る金二両・閼伽具一具・釼一柄を拝見し奉る。松燭を立てて下る。郡郷の高下貴賤、峯の燭を見て、火を合せて、落涙せずと云ふことなし。

有鑑下り、山宮に至り、三ヶ日の間を経（フ）。宮司より始め、神官らに至るまで、古老人ら、有鑑讃歎の示現を蒙らざる者なしと云々

次の年、四月十九日を以て峯に登るの間、化童子の見え奉り、夢の如くして覚む。すでに頂上に登りての後、両度此の童子を見奉る。下て後、峯の下五十里を過ぎて、往生寺あり。夜も宿の夢に三人の童子を見る。一人は女形にして白馬に乗る。二人は並びて馬に乗る。童子の曰く、地その山となるの日、山崩れて、海に没して平地と成る。今の浮嶋が原なり。葦高山と平地の間、窪（クホ）くめ、池と成り、冨士沼と名

づく。〈已上記也〉

金時上人の次に覧薩上人あり。金時上人の跡を逐て、天元六年〈癸未〉六月廿八日を以て峯に登る。金時上人跡以法の時、鎮西へ擲らる。惟郷（コレサト）、覧薩彼の邑に於て、終に死去す。金時上人と覧薩上人との間年記幾年と云ことを知らずと云々。

次に日代上人あり。天喜五年〈丁酉〉六月十八日を以て峯に登る。時に大いに燃炬を揚ぐ。然りといへども、事無くして下向しおはんぬと云々。仍って、向後（キャウコウ）証拠（シャウコ）のために、竹筒の中に、金泥小字法花経を籠め奉る。その上に檜板（ヒノキイタ）を置て、花瓶・火舎・閼伽具・鈴・杵等の仏具を安ず。

次に僧有鑑あり。当国所生の人なり。垂髪の当初（ソノカミ）より、成人の比に至るまで、伊豆国走湯（ソウトウ）山に常住し、出家已後、永く名利の学堂を捨てて、ひとえに無上の仏道に趣く。常に有験の霊地を尋ねて、鎮に菩提の妙果を求む。種々の難行苦行、種々功徳善根、勝計すべからず。なかんずくに、塩（エン）・酢（ソ）・酒・辛（シン）を断ちて、姪絹（ケン）・綿（メン）の類を禁じて、三時の供養法を行じ、十二時法花懺法を読むに、種々の真言を念じ、種々の観法を凝らす。

吾れはこれ、三宮なり。今一人曰く、吾は悪王子なり。今一人の曰く、吾れは剱御子（ツルキノミコ）なり。此の童子ら異口同音に唱えて曰く「汝をば、末代上人と名づけん」となり。先生の行業に依って、此の名を着く。夢覚ての後に、次第に三反これを唱う。ここに、結ぶところの菴室に世間の具等を置く。滝本（タキモト）と名づく籠ること数日して、路を掃きて麓宮にいたると云々。

長承元年〈丑子〉四月十九日、上人末代、峯に登り、日代上人仏経奉納の巌窟において、閼伽の器・鈴・独鈷・一尺剱一柄・金二両を置き奉る。同年六月十九日、また剱一柄・金一両を納め奉る。同年六月云々。同二年四月五日、峯に登りて、如法経一部十巻を埋み奉る。また面八寸の鏡に地主不動明王三尊像を鋳顕し奉るを、彼の窟に安じ奉る。銘に曰く「走湯山の住僧末代上人、生年二十九、浅間大菩薩の示現を蒙りて、当峯に攀ること四ヶ度」と。

浅間大菩薩縁起

本奥に云く、

建長三年〈辛亥〉六月十四日、富士滝本往生寺に於て書写し了ぬ。

二　『浅間大菩薩縁起』の構成

この『浅間大菩薩縁起』（以下「新出『縁起』」と記す）は、冒頭に、「月氏国」の一つの島が日本に移動し、富士山として湧出した由来を記し、ついで役行者の伝説を語る。これに続く部分は失われているが、巻末には富士山の地形についての説明と、列擲五年（紀元前三〇一年か）の新山の噴出を記録している。最末尾に末代上人の登頂にいたる経緯を記す

縁起の主要部分が失われているため、全体の構成をうかがうことはできないが、欠落部分を推定させる資料が他に若干存する。一つは、近年金沢文庫保管古書の中から見出された富士縁起の一本の断簡である。[5] 鎌倉末期から南北朝初期にかけて数多くの神道書を書写した極楽寺住僧の全海の筆跡になるこの断簡は、いわゆる赫夜姫（かぐやひめ）と愛鷹山麓の「乗馬里」に住む竹取翁をめぐる説話と、浅間大菩薩の神号の深義、「新山」の出現、末代上人が富士山中に開創した往生寺の由来を記す。これは形態の上では新出『縁起』とは別個の写本であり、接続しうる断簡ではないが、内容的には新出『縁起』の欠脱部分を埋める記事である可能性は高い。

もう一つは、かつて村山浅間神社に伝わっていた、村山池西坊伝来の『富士山縁記』である。[6] この本は、近世に訓読された形で筆録されたものであるが、浅間大明神の神号の深義、末代上人の往生寺開創、滝本不動尊の由来の記事について、全海本をほぼ踏襲した文言が確認される。本文そのものは中世後期から近世にかけて何度か手が加えられている形跡があるが、鎌倉時代までさかのぼる記事を含んでいることが認められる。

この村山本『縁記』は、孝安天皇九二年庚申（紀元前三〇一年）の富士山出現、赫夜姫と竹取翁説話、新山の由来、役行者の富士登頂、登山道十合の因縁、富士禅定の意義、聖徳太子の登山、富士八峰の密教的解釈、富士山中の霊跡、富士山の異名、末代上人の由来、村山浅間社と別当興法寺の縁起を記し、最後に富士登山（禅定）を勧める記事で終わっている。

村山本の『縁記』は、おそらく新出『縁起』を下敷きに、近世的な潤色を施したものと考えられるので、新出『縁起』の欠脱部分にも、これに近い内容の記事があった可能性は高い。

なお中世までさかのぼる富士縁起としては、このほかに今泉東泉院本『富士山大縁起』（未翻刻、東大史料編

纂所影写本）があり、富士山の天竺渡来説話や、金時・覧薩の名を合成したとおぼしき「金讒上人」を開祖とする伝承などがあり、新出『縁起』と類似した構想・表現を持つ点で注目される。これについては翻刻を含めて別途考証する必要を感じている。また大宮浅間社の公文富士氏に伝わった『富士大縁起』（浅間神社社務所編『浅間文書纂』所収）は、聖徳太子・役行者・赫夜姫の伝説を含み、末代上人の登山を記すが、記事は簡略である。

三　新出『縁起』と滝本往生寺

さて、新出『縁起』は、巻末に建長三年（一二五一）「富士滝本往生寺」において書写した旨の本奥書がある。滝本往生寺とは、富士山の村山登山口（廃道）の一合目、ちょうど森林限界にあたる地点に江戸中期まで存在した山岳寺院である。この地は、村山浅間社を「発心門」とする村山登山道の「等覚門」に位置づけられ、石室の中に大日如来を安置した「御室大日」の別名であったと考えられる。

また「滝本」とは、往生寺よりやや下ったところから分岐し、宝永山の下方にあった霊場で、洞窟の中に末代上人感得の不動明王を安置し「窟不動」と呼ばれていた。この付近には湧水があり、滝となっていたところから「滝本」の地名がつけられたものであろう。宝永山噴火の後、岩屋不動の位置は不明となっているという。(7)

中世に栄えた村山修験の最大の根拠地は、山麓の村山浅間社であった。ここには浅間明神・大日堂・大棟梁権現の三社の伽藍が設けられ、修験者が集住し、最も神仏習合の著しい霊場であった。三社を総称して興法寺あるいは村山寺と呼び、伊豆走湯山の所領となっていた。応永五年（一三九八）の「走湯山領関東知行地注文」には「一　駿州　富士村山寺　聖一色」と記されており、村山が富士修験の拠点として確立した組織を形成していたことがうかがわれる。(8) 現在も村山浅間神社には、正嘉三年（一二五九）の像内銘をもつ胎蔵界大日如来像や、中世に造立された役行者・不動明王像などが残されている。

村山よりさらに山中に位置する往生寺は、村山浅間・興法寺の奥之院、開山堂的な性格をもつ寺院であったようである。村山修験が開祖と仰ぐ末代聖人は、村山の「大棟梁権現」として神格化されており、末代の登頂に備えたベース・キャンプの遺跡に建立されたのが往生寺であったと考えられる。往生寺（御室大日）は現在は廃絶し、かすかな遺跡を残すのみであるが、室町時代末期

に狩野元信が描いた「富士曼荼羅図」（富士山本宮浅間大社所蔵）には、山腹中央に往生寺と推定される板葺きの大きな伽藍が配置されている。

新出『縁起』の本奥書を信ずるならば、建長三年（一二五一）には、すでに往生寺はこのような縁起を保持する寺院として確立し、登山のための仮設基地の域を脱していたことが分かる。

四　村山修験と走湯山修験

新出『縁起』によれば、富士登頂を果たした末代は、本名を有鑑といい、駿河国の人であった。幼い頃より伊豆国走湯山に入り、学問よりも荒行をおこなう行者として修行を重ね、天承二年（一一三二）閏四月十九日、二十八才にして初登頂に成功した。この際、頼然という僧が同時に発心し、末代に協力したというが、頼然がともに登頂したかどうかは記されていない。末代の登頂は、山麓の「高下貴賤」の住人の支援を受け、下山後は山宮（大宮浅間社の末社）の宮司・神官らが讃歎したという。有鑑が登頂をめざして山腹に設けた庵室（後に滝本と命名）で修行中、浅間大菩薩の眷属である三宮・悪王子・剣御子が童子形で出現し、有鑑に「末代上人」の名が与えられた。

こうした記事によって、末代の出身が明確となる。すでに、室町時代成立の『地蔵菩薩霊験記』（続群書類従所収）の日金山地蔵の記事によって、末代が走湯山所縁の僧であることは推定されていたが、新出『縁起』の記事は、これを確証している。末代はその後も富士登頂を頻繁に行い、その名声が叡聞に達し、鳥羽上皇以下親筆の如法経（一切経）が富士山頂に奉納されたのは久安五年（一一四九）のことであった。このとき「富士上人」と呼ばれた末代は「富士山に攀登することすでに数百度に及び、山頂に仏閣を構え、これを大日寺と号」したという（本朝世紀）。富士修験の根拠地である村山が走湯山領として認められたのは、このような末代の活動によるものである。

ところで新出『縁起』によれば、末代は最初の富士登頂者ではないという。末代が初めて登頂に成功したとき「金時上人より日代上人に至るまで、先に登る上人等の交名・宝物等これを見」たという。『縁起』の山頂の説明の箇所によれば、これらの過去の登山者の遺物は、山頂の未申「冠の岳」の前の石室に安置されていたという。方角から見ると、「冠の岳」は現在の富士山頂外輪にあ

る三島ヶ岳（旧称文殊ヶ岳）にあたる。ちょうど昭和初期にこの付近の「コノシロ池」畔から、木郭に納められた数百巻におよぶ経典軸木残欠・承久年間の墨書のある経筒・「末代聖人」[9]の名を記した埋納経残片が出土した事実と符合する。

富士山の最初の登頂者という金時上人は「年記不知」とされるが、その次に天元六年（九八三）六月二十八日、覧薩上人が登頂したという。そして天喜五年（一〇五七）六月十八日に日代上人が登頂し、末代の直接の先蹤となった。日代の登頂の際、山頂で小噴火がおこった（時に大いに燃炬を揚ぐ）が、山頂に証拠の写経や仏具を安置して無事に下山したという。

新出『縁起』が記す末代以前の金時・覧薩・日代、三名の富士登頂者は、いずれも従来全く知られていなかった人名である。ただ都良香（八三四～七九）の「富士山記」（本朝文粋所収）に、山頂の景観が比較的詳しく描写されていることから、その頃登頂した人物がいたことは想像されていた。新出『縁起』が引用する『金時上人記』なるものが、こうした記述の下敷きになった可能性はあり、伝説的な人名であるにしても、九世紀ごろに富士登頂に成功した人物がいた可能性は高い。

しかし末代の直接の先蹤といえる日代の存在は、ある程度確実な記事によっていると考えられるのに対し金時・覧薩の二名は事跡も明瞭ではなく、実在性に疑問が残る。なぜならば、この二人の名前が走湯山の開創伝説に登場する仙人の名前を模しているからである。

院政期には成立していたと考えられる『走湯山縁起』（群書類従所収）によれば、役行者が走湯山を開創する以前、三人の仙人が現れて、この山を開いた。第一に登場したのが松葉仙人（仁徳天皇七十一年、西暦三八三）、第二に蘭脱仙人（清寧天皇三年、西暦四八二）、第三に金地仙人（敏達天皇四年、西暦五七五）される。いずれも仏教公伝以前の存在で、日金山の廟窟に姿を隠し、走湯山の開祖として祀られたという。

現在も走湯山の奥院にあたる日金山地蔵堂の裏山に、三仙人の墓所と伝える宝篋印塔がある。日金山の頂上（十国峠）は、伊豆・箱根・富士を一望に収める眺望地点として観光地となっているが、中世以前にあっては、これら三所の修験霊場の要衝としてさらに重要な宗教的意味を持った地点とされていたことは想像に難くない。蘭脱（覧薩）・金地（金時）という名が、富士の開山とされたことには相応の意味があったと考えねばならない

であろう。

平安末期の成立とされる『伊豆国神階帳』（群書類従所収）では、伊豆山（走湯山）の祭神を「正一位千眼大菩薩」としている。富士の「浅間大菩薩」と通じる神号を称するところに、平安時代後期における走湯山と富士山の密接な関係が背景として存在するのではないであろうか。

なお近年、火山学の立場から、古典籍に見える富士山の噴火・噴煙記事を検証された都司嘉宣氏作成の「富士火山活動文献年代図」によれば、覧薩登頂とされる九八三年は山頂噴煙の小休止期、日代登頂の一〇五七年は噴煙活動期の終盤、末代登頂の一一三二～四九年は噴煙の休止期に当たり、『縁起』の登頂記事をある程度裏付けているように見える。(10)

五　新出『縁起』と富士修験の遺品

新出『縁起』によれば、天承二年（一一三二）閏四月十九日、末代上人有鑑が初めて富士登頂に成功したとき、山頂で「金時上人より日代上人に至るまで、先に登る上人等の交名宝物等」を見たという。特に末代のすぐ前に登頂した日代が山頂に奉納した遺品は「竹筒の金泥の経、同じく石窟の中に納め奉る金二両・閼伽具一具・剣一柄」であったという。これらは「向後証拠のために、竹筒の中に金泥法花経を籠め奉る。その上に檜板を置て花瓶・火舎・閼伽具・鈴・杵等の仏具を安」じていたという。日代の登頂は天喜五年（一〇五七）とされるので、このような山頂奉納品は、十一世紀より日本各地で盛んに行なわれた如法経埋納、経塚の造営と軌を一にする遺例と言えよう。

こうした先人を受け継いで、末代も長承元年～二年（一一三二・三）にかけて、山頂に仏具を納めている。新出『縁起』の巻末の記載によると、長承元年（一一三二）四月十九日に閼伽器・鈴・独鈷・一尺剣・金二両を、六月十九日に剣・金一両を、さらに翌年四月に如法経一部十巻と「面八寸の鏡に地主不動明王三尊像を鋳顕した」ものを山頂巌窟内に安置したという。これは線刻の鏡像であったと思われるが、「走湯山住僧末代上人生年二十九、蒙浅間大菩薩之示現、攀当峰四ヶ度」という銘文が刻まれていたという。

後世の村山修験においては、富士浅間大菩薩の本地は大日如来とされ、山頂八峰には地蔵・阿弥陀・観音・釈迦・弥勒・薬師・文殊・宝生の八仏が配される。しかし

こうした本地仏が普及する以前の末代の時期には、不動三尊が地主神として安置されていたというのである。

富士山中からは、いくつかの鏡像・懸仏が出土している。[11] 至徳元年（一三八四）銘の大日如来二尊並座鏡像（小山町教育委員会保管）を最古の遺例とし、富士山形の中に大日如来像を表した応永三二年（一四二五）の上野介満範（熱田大宮司一族の野田満範か）奉納の懸仏が知られており、富士山全体を仏で表現しようとすれば、大日如来で表されるのが普通である。また山頂諸峰に奉納されたと思われる文明十四年銘（上総国木佐良津大工和泉守光吉作）懸仏は、薬師如来・不動明王の二作が発見されている。富士山全体を曼荼羅世界に見立てる村山修験の観点からすれば、さまざまな尊像が安置されていてもおかしくはない。

おそらく村山修験においては、末代の遺跡である窟不動の信仰にもとづき、不動明王を富士山の「地主」として信仰することが行なわれていたのではなかろうか。まだ噴煙の消えやらぬ時代の富士山においては、大日如来の忿怒身である不動明王の方がふさわしいと考えられていた可能性はある。[12]

なおこれにちなんで、江戸時代まで吉田口二合目の小室浅間社に安置されていたという不動明王の木像（世には「日本武尊像」と伝承）は注目される。『甲斐国志』（巻七一）によれば、この木像は長三尺二寸五で「奉造立勧進走湯山住金剛仏子覚実覚台坊二十度仏子（ママ）興福寺運珍円浄作文治五年七月廿八日」という銘文が背面に刻まれていたという。また同所には長一尺六寸五分の「女体合掌の像」があり、これにも「奉造立勧進走湯山住金剛仏子覚実覚台坊廿五度仏師興福寺住定海宝月坊作建久三年四月九日」と彫りつけてあったという。実物が失われているので、真偽についてはただちに判定できず、これらの仏像が吉田口二合目に置かれた事情も不明であるが、鎌倉時代初期に走湯山の僧侶が富士山に不動明王像を納入したとする銘文の記載は、早い時期の村山修験の信仰を示すとも考えられよう。

山麓の浅間神社各社に祭られていた神のイメージを伝える資料は少ないが、富士山の神は女神であると認識されていたことは確かである。浅間神社の祭神を木花咲耶姫とするのは近世以後の新しい考え方であるが、中世の「浅間大菩薩」の造形は、鎌倉時代（正和四年〈一三一五〉）の造像銘をもつ忍草（しのぶくさ）浅間神社（山梨県忍野村）の三躯の神像から窺うことができる。若い女神と、鷹飼・

犬飼と伝えられてきた脇侍の老夫婦像は、明らかにかぐや姫と竹取翁夫妻をモデルにしたものである。富士縁起諸本に説かれるかぐや姫説話は、単なる唱導の方便や文学的創作として取り込まれたのではなく、富士山の神の由来を説明する「縁起」として理解されていたのであった。

小　結

断片的な形ではあるが、富士村山修験の根本となる縁起が発見されたことによって、中世の富士信仰を体系的に考えるための重要な手がかりが得られたと言えるであろう。富士山を両界曼荼羅に見立て、山内各所に霊場が設けられた中世の信仰空間、あるいは富士山の出現・聖徳太子・役行者・かぐや姫・末代上人らを連ねる伝説上の歴史など、新出『縁起』を基軸にして、中世の富士山をめぐる時空間の観念世界を復元する道が開かれるように思う。

さらに、中世の富士信仰が、富士山をこえた広がりをもっていたことに注目したい。村山修験は、人脈において伊豆（走湯山）・箱根の修験と密接に結ばれていた。そしてこの地域では、海の修験（伊豆辺路（へじ）・伊豆諸島）と山の修験が交流しつつ、熊野・大峰にも劣らない広大な霊場を形成していたようである。鎌倉時代になると、伊豆・箱根・三島への幕府の手厚い保護によって、これらの修験霊場は強大な勢力をもち、鎌倉後期には律宗も参入し、太平洋海運の経営（走湯山燈油料船）までも行なっていたとも推定されている。

断片的な文献史料と文化財を用いて、聖俗両界にまたがるこうした中世の伊豆・箱根・富士修験の活動を解明することが、今後の大きな課題となっていくであろう。

注

（1）近世以前の富士信仰については、井野辺茂雄『富士の歴史』（「富士の信仰」シリーズ第一冊、浅間神社社務所、一九二八年）に詳しい記述がある。また鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』（山岳宗教史研究叢書九、名著出版、一九七八年）・平野栄次編『富士浅間信仰』（民衆宗教史叢書一六、雄山閣出版、一九八七年）に比較的近年の論考が集成されている。

（2）宮家準「富士村山修験の成立と展開」（『山岳修験』六、一九九〇年）。大高康正「中世後期富士登山信仰の一拠点―表口村山修験を中心に―」（『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』四、二〇〇三年）

（3）池田令道「竹取物語と富士戒壇の縁由」（大阪市広宣

寺寺報『聖道』一四二～一四五、二〇〇三年）

（4）西岡「尊経閣文庫所蔵『古文状』について」『金沢文庫研究』三〇五、二〇〇〇年）

（5）津田徹英編『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫展示図録、一九九六年）に収録されているが、その後の調査で若干補正すべきところが見出されたので、ここに改めてよみ下しの形で提示しておきたい。なお原色図版を金沢文庫展示図録『神社縁起と神仏霊験譚』（二〇〇三年）三八頁に収録している。

【金沢称名寺伝来、全海筆「富士縁起（仮称）」断簡】

（前欠）

□於是、女養母に語りて云く、親子之契浅からず、養育之恩誠に重し、然りと〔雖〕も、我久しく此の處に住すべからず、今般若山に登るべしと、養母答て云く、□□如何せん、女云く、常来へ必す相見るべしと、即ち山に登て巖崛に入り畢ぬ、

□間、帝王乗馬里に幸し玉ふ、翁由緒（ユエ）を奏す、帝悲泣して翁に伴て般若山に幸し玉ふ、登ること第五の層に及びて、休息良久（ヤ）して、玉冠を脱て此處に留む、〔頂〕上に登りて、巖崛に臨む、女出向て、微咲（アサワラヒ）て曰く、願くば帝王此に住み玉へと、帝即ち〔崛〕に入り畢ぬ、件の崛は釈迦の嶽の東南の角に在り、玉冠は石と成て今に在り、

□所に石を積て陵と名く、

延暦廿四年、巫女に詫して曰く、内には深妙の極位を秘す、大日覺王之身是なり、外には和光之の塵形を現す、我を浅間大明神と号す、浅智之衆生に間（マシハ）りて、難化の輩を導く義なり、之に依て、平城〔天皇〕の御宇大銅元年に金社を立て、勧請し奉り、乗馬里を改て□斉京（モハラヒトシ）と□矣、伽藍を建立して大日如来を安置し奉ると云々

□翁は是愛鷹（アハシタカ）の明神なり、嬢は又犬飼之明神なり、二神新山に住す、因位の所変に依て、以て其の名と為す、而を嬢をは勧請し奉て新山宮（ニヰ）と名く、□勧請し奉る、其の名を改めず、新山は烈擲五年の暮春之比、天□自り来るにより、故に新山と名く、水精の嶽は末代聖人往生寺を建立し玉し、□夜□光明有て、地中自り出て、遙に照す、奇特の思を生て、其夜夢想有り、青衣の天女手に寶珠を持て、白雲に乗て、来て聖人に告て曰く、□是浅間大明神なり、所現の瑞相は般若山の精（セイ）、大日如来の三〔昧〕耶形此の處に御坐す故なりと云々、夢覺て點（シルシ）をさして明朝に之を掘る、水精有り、形般若山の如くして、少しも異こと無し、随喜を生じて感涙を垂る、敬て往生寺の大日如来の御身中に納め奉る者なり、瀧本は悪王子の嶽の麓、東南の角に在り、岩屋の上自り水流落て盈縮有こと無し、末代上人此の所を行し時両目開の索印の不動現し玉ふ、故に

（後欠）

（6）五来重編『山岳宗教史研究叢書』一七「修験道史料集Ⅰ」（名著出版、一九八三年）に、遠藤秀男氏の筆写本による翻刻が収録されている。

（7）『富士山村山口登山道跡調査報告書』（富士宮市立郷土資料館、一九九三年）

（8）『小田原市史』史料編古代中世Ⅰ、一八一号所収醍醐

寺文書。なお駿河国内に村山寺と並んで記載される「聖一色」という地名は静岡市内に現存する。富士山や修験とのかかわりを示す痕跡はないが、国府至近の水運の要地に修験の拠点が形成された可能性は充分に考えられる。

(9) 佐野武勇「富士山頂上三島ヶ岳の経塚」（『考古学雑誌』二〇―一〇、一九三〇年）・足立鍬太郎「富士山頂三島岳南経塚遺物中の経筒と経巻とにつきて」（『考古学雑誌』二〇―一二、一九三〇年）・三宅敏之「富士曼荼羅と経典埋納」（五来重編『山岳宗教史研究叢書』一四・「修験道の美術・芸能・文学Ⅰ」（名著出版、一九八〇年）・企画展図録『富士の信仰遺跡』（富士吉田市歴史民俗博物館、二〇〇二年）

(10) つじよしのぶ『富士山の噴火―万葉集から現代まで―』築地書館、一九九二年）

(11) 『役行者と修験道の世界』（大阪市立美術館・東武美術館巡回展図録、一九九九年）あるいは『富士吉田市史』通史編第一巻第三章第四節「富士に集う人々」（山下立執筆、二〇〇〇年）に、富士山にかかわる多数の文化財が紹介されている。

(12) 鎌倉末期の天台系の伝承を集めた『渓嵐拾葉集』巻第六には、富士山の「頂上ニ八葉ノ形有リ。昔ハ火炎立タリ。故ニ富士ノ煙ト云ヘリ。頂上ノ八葉ハ不動ノ頂上ノ蓮花也」（大正新修大蔵経第七六巻五二二頁）という記事と、富士を金剛界曼荼羅に、武蔵野を胎蔵界の曼荼羅に比するという興味深い記述がある。いわば大日如来の忿怒身としての不動明王を富士山の本地に見立てる考え方が中世前期に確実に存在したことを示すと言える。この資料は高橋秀榮氏の御教示による。

〔付記〕　本稿は、平成九～一一年度文部省科学研究費補助研究『係類にもとづく神像彫刻の総合研究』（研究代表者・紺野敏文氏）の研究成果報告書として提出されたものである。しかし一般の眼にふれる機会がないため、今回紺野氏の御了解を得て、参考文献の追加など、若干の修訂を加えて公表することにした。なお、本稿完成の後に、新たな知見を含めて次のような研究成果を公表しているので、参照していただければ幸いである。

・「中世の富士山とその信仰」（『山梨県史のしおり』資料編6付録、二〇〇二年）
・「中世の富士山―「富士縁起」の古層をさぐる―」（峰岸純夫編『日本中世史の再発見』吉川弘文館、二〇〇三年）
・『寺社縁起と神仏霊験譚』（神奈川県立金沢文庫企画展図録、二〇〇三年）